

高齢者の居場所としてのコミュニティカフェの検討

—利用者・ボランティア・代表者の3つの視点から—

保健医療学専攻・医療福祉学分野・医療福祉学専攻

氏名：川口容子

キーワード：コミュニティカフェ・高齢者・居場所・ゆるいつながり

1. 研究の背景と目的

近年、社会の中に「居場所」を見出すことが人々にとっての重要な課題になったといわれる¹⁾。

尾崎ら²⁾は、都市部の高齢者の「居心地の良い場」を構成する大きな要素として、人間関係をあげており健康や生きがい形成に寄与する重要な要因と位置づけている。高齢者にとって居心地の良い場は、最も長い時間を過ごすことになる住み慣れた地域が挙げられる。大都市圏における高齢者の居場所としての取り組みの一つにコミュニティカフェがあり、年々その数は増加傾向にある³⁾。コミュニティカフェの増加は、コミュニティカフェの多様な効果への期待を反映していると考えられるが、利用者である高齢者とコミュニティカフェの関係者双方から捉えた研究は極めて少ない。

本研究では、大都市に暮らす高齢者の社会的孤立防止にかかわる課題をコミュニティカフェの意義と期待の観点から、コミュニティカフェを利用する高齢者とボランティア、及び代表者の3つの視点より明らかにするとともに、今後の社会的孤立防止に向けた地域実践の示唆を得ることを目的とした。また、大都市で行われているコミュニティカフェ3か所の調査を通じて、大都市で暮らす高齢者が住み慣れた地域で尊厳ある生活を継続していくうえで、地域で安心して過ごすことのできる居場所としてのコミュニティカフェのあり方を探索する。

2. 研究方法

研究1:コミュニティカフェに関する3つの視点からの調査と検討—ほっと安心カフェにおいて—

調査対象者は、ほっと安心カフェを利用する高齢者88名とボランティア15名と代表者1名である。ほっと安心カフェは、新宿区にある都営百人町四丁目アパートで行われているコミュニティカフェであり、この地域に着眼した理由は、以下のとおりである。

- ① 新宿区は日本の中心的大都市であり、我が国全体の高齢化を上回る早さで進んでいること
- ② 活発な人口移動やさまざまなバックグラウンドを持った人が集まり、多様性に富んだ地域であり、それらの生活圏では、地域とのつながりの希薄性が目立ち、高齢者の生活経験や価値観が異なると考えられること
- ③ 社会的孤立感が目立つと考えられること

調査方法は、現場（フィールド）調査とインタビュー調査（利用者、ボランティア、代表者）からの質的データとアンケート調査（利用者）の量的データとを組み合わせたトライアングレーション手法を用いた。量的データのサンプリングサイズの適切性は Bartlett test of sphericity、妥当性は KMO で検討した。対象地域に3年半前から延べ140回にわたってのボランティアと地域の行事等にも参加するなどのフィールドワークを行い、調査対象者と良好な関係性（ラポール）を結びながらデータ収集に務めた。現場（フィールド）で観察された行為を時間的な流れや現場での脈絡とともにその関連性も含めて記述した。質的データの分析には、量的データの分析結果にも注目しながら逐語録のデータからカテゴリ化し、関係結果図を作成した。研究途上においてフィールドノーツのチェックを行い、調査後のデータ解釈ならびに概念の確認に関しては第三者による指導を繰り返し受け精緻化を行った。量的データの分析には、因子分析と重回帰分析の多変量解析を行い、居場所感に影響を与えている要因を抽出し、どの程度影響を与えているかを分析した。

研究2:カフェメモリーとカフェだんだんについて—代表者の考え方—

調査対象者は、各カフェ代表者1名、計2名である。カフェメモリーとカフェだんだんは、新宿区内で行われているコミュニティカフェである。対象地域として着眼した理由は、以下のとおりである。

- ① 研究 1 と同様の地域であること
- ② 高齢者の孤立防止や地域のつながりを広げる目的に始まったこと
- ③ 居心地の良い場と考えられること

調査方法は、インタビュー調査であった。

3. 倫理上の配慮

本研究は、国際医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した。承認番号:15-1g-5

4. 結果

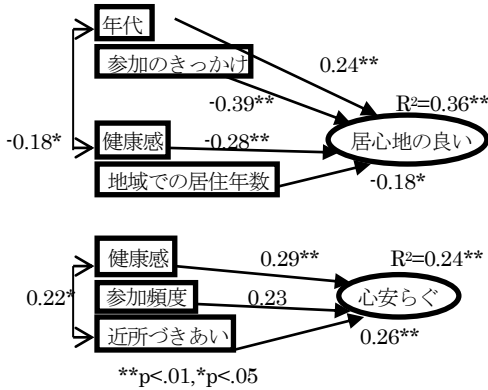


図 1 重回帰分析結果

研究 1:現場 (フィールド) 調査結果では、利用者が自由に過ごす時間が多く、健康相談や血圧測定といった日々の健康状態の確認やアドバイスを受けることができていた。アンケート調査結果からは、男性 (12 名) よりも女性 (76 名) が多く、80 歳代以上が 77 名、同アパートにおける 65 歳以上の単身世帯の 28.2%が利用していた。利用年数は 3 年以上前からが 45 名、利用頻度は月 2 回以上が 49 名であった。コミュニティカフェを安心できる場、くつろげる場、いきいきできる場、落ち着ける場と半数以上が位置づけていた。健康であると感じている者は 70 名、そのうち、自身の健康・身体の状況が心配である者は 23 名であった。近所つきあいではあいさつ程度が 40 名、頼りになる人は近所の人が 47 名であった。

Bartlett test of sphericity の有意確率は 0.000 ($p<.01$) で本標本は因子分析に適合していた。KMO の妥当性の測度は 0.713 で本標本の妥当性は望ましい水準であった。因子分析で 2 因子が得られ重回帰分析において 2 因子ともに健康感が影響を与えていた。インタビュー調査結果では、利用者は《出会いがある》や《つながりがある》交流の場として、ボランティアはボランティア活動が自らの【前に進む力をつけていく】働きとして、代表者は【きっかけづくり】や【自立へつなげる】場と捉えており、3 つの視点とも肯定的意義を有していた。【ふらっと立ち寄れるお茶の間】のような身近で気軽な場に、【自由さ】のある〈ゆるやかなつながり〉があることで《居心地の良さがある》と位置づけていた。期待では、【双方の経験や知識を活用する場づくり】が生きがいや【自立へつなげる】と捉えていた。研究 2:両カフェともつながりを広げ、心地よい場であることを重要視していた。「カフェメモリー」では、《出会いの場》や《受け入れられる場》であることで利用者だけでなく介護者や家族にも居心地の良い場となっていくと位置づけていた。「カフェだんだん」では、【元気な高齢者を育む】場と位置づけていた。【仕事としての取り組み】や【後継者の育成】といった【継続における課題の認識】もあった。

5. 考察とまとめ

大都市で暮らす高齢者にとって、コミュニティカフェは、ふれあいやつながりといった人との交流の場となっており、居心地の良い場となっていた。ボランティアは自身の生きがい、代表者は自立への場と捉えていた。研究 1 の結果からは、利用者のコミュニティカフェに対する最大公約数的な捉え方は、“自由さのあるゆるい関係性”としてのつながりであり、“身近で気軽”な場ということであった。コミュニティカフェを利用することで結果として近隣とのつながりも生まれる可能性があると考えられた。また、日々の心身の状態を相談できる場であることも将来の健康や身体の不安を軽減している可能性があった。研究 2 の結果からは、2 つのコミュニティカフェは、ほっと安心カフェと同様に、高齢者の孤立化を防ぎ、地域のつながりを広げることを目的としていた。但し、プログラム等はそれぞれの特色があり、自由度が高かった。

コミュニティカフェは、地域や近隣との自由でゆるい関係の交流をとおして、社会的孤立を防止し、自立への一助になるのではないかと考えられた。

6. 引用文献

- 1) 則定百合子. 青年期における心理的居場所感の発達的变化. カウンセリング研究 2008;41:64-72.
- 2) 尾崎有輝, 山崎寿一. 地域における高齢者の生活行動と居場所の特性; 神戸市灘区六甲道地区を対象として. 日本建築学会近畿支部研究報告集 2009;49:353-356.
- 3) 大分大学福祉科学研究センター. コミュニティカフェの実態に関する調査結果[概要版]. 大分大学福祉科学研究センター 2011;1-16.